

平安京右京北辺三坊六町跡発掘調査現地公開資料

2014年3月1日

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所在地：京都市北区大將軍坂田町22番

調査面積：約1580㎡

調査期間：2013年12月16日～2014年3月31日（予定）

調査地の概要

調査地は、平安京右京北辺三坊六町跡の北東部にあたります。今調査地の周辺では、これまでに花園団地の建設や府立山城高校の改築に伴い、比較的大規模な発掘調査が実施され、奈良時代の竪穴建物や掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物などが見つかりました。今回の調査でも、奈良時代から室町時代の遺構が見つかりました。

見つかった遺構

奈良時代の遺構 竪穴建物3棟（1～3）と掘立柱建物3棟（1～3）が見つかりました。竪穴建物2はほぼ全体を検出することができました。平面形は方形で、一辺の長さは5～6mあります。調査区南西隅では東西方向の溝1が見つかりました。また、これら以外にも、調査区全体でこの時期の柱穴が多数検出されました。周辺調査でも奈良時代の遺構が多数見つかり、調査地一帯に奈良時代の集落が広がっていたと考えられます。

平安時代の遺構 調査区北東部で掘立柱建物4、北部で掘立柱建物5が見つかりました。調査区北西部には東西方向の柱列1があります。

鎌倉時代の遺構 調査区西半で南北方向の溝2～8が見つかりました。田畑の耕作に伴う溝と考えられ、鎌倉時代には耕作地となっていたことがわかりました。

室町時代の遺構 調査区西半で南北方向の溝9が見つかりました。田畑を区画する溝と考えられます。この溝を埋めて、掘立柱建物6が建てられています。この建物は柱と柱の間隔が狭く、壁立ち構造の蔵のような建物の可能性があります。建物6の北では円形の石組井戸と南北方向の柱列2が見つかりました。石組井戸は直径が約2.5mあり、京都市内では最大級の井戸です。底には木で枅が組まれ、その中に井戸を埋めるときに納めたと考えられる巨石が2石据えられています。

まとめ

今回の調査成果により、調査地が奈良時代の集落の一部であったこと、平安時代には平安京に組み込まれて宅地として利用されたことがわかりました。その後、鎌倉時代から室町時代の前半までは耕作地となっていました。室町時代後半の一時期には建物や井戸がつくられ生活の場所になり、江戸時代以降は再び田畑となったようです。このように、調査地の歴史の変遷を復元できる資料が得られたことは大きな成果です。

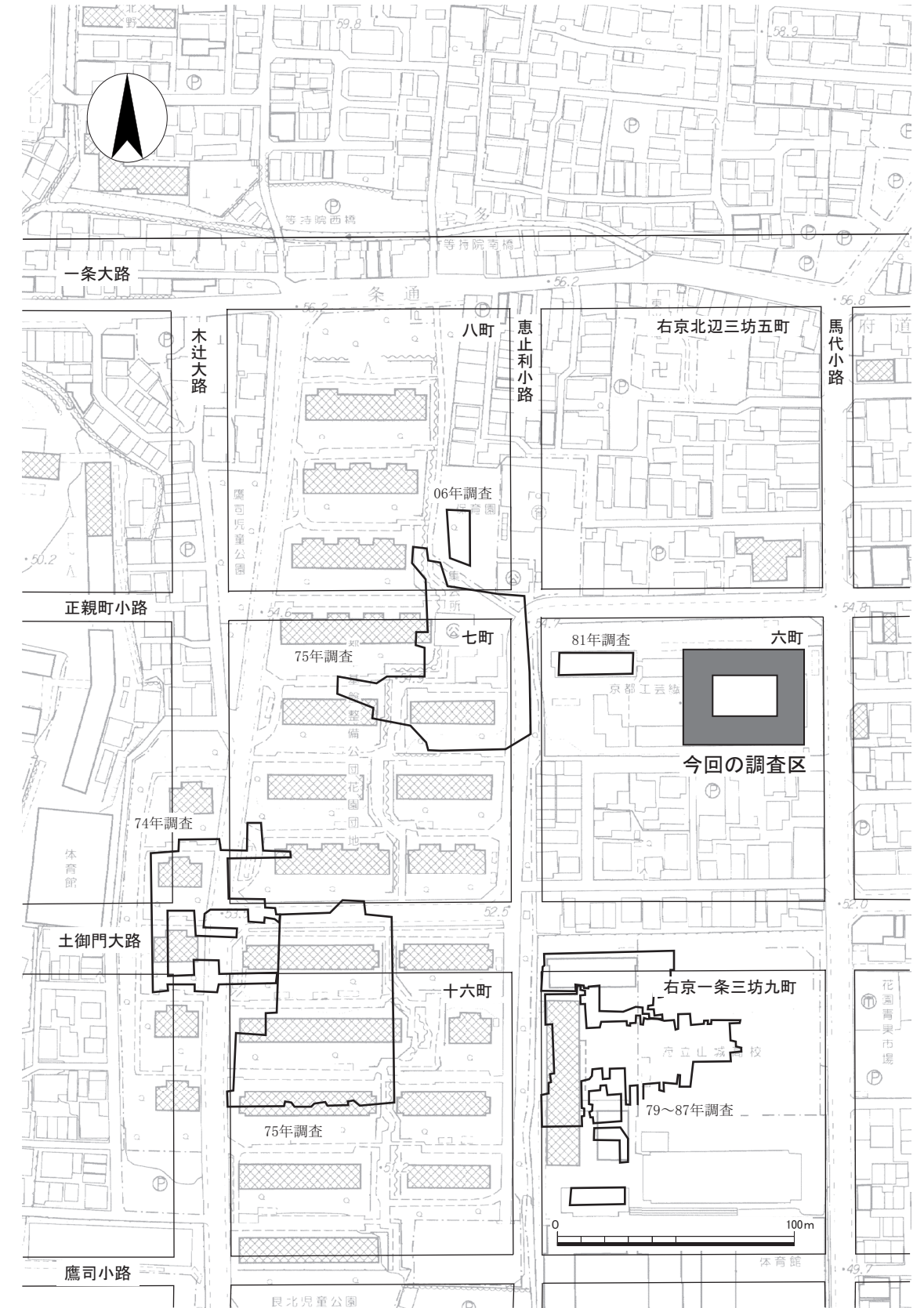


図1 調査位置図（1：2,500）

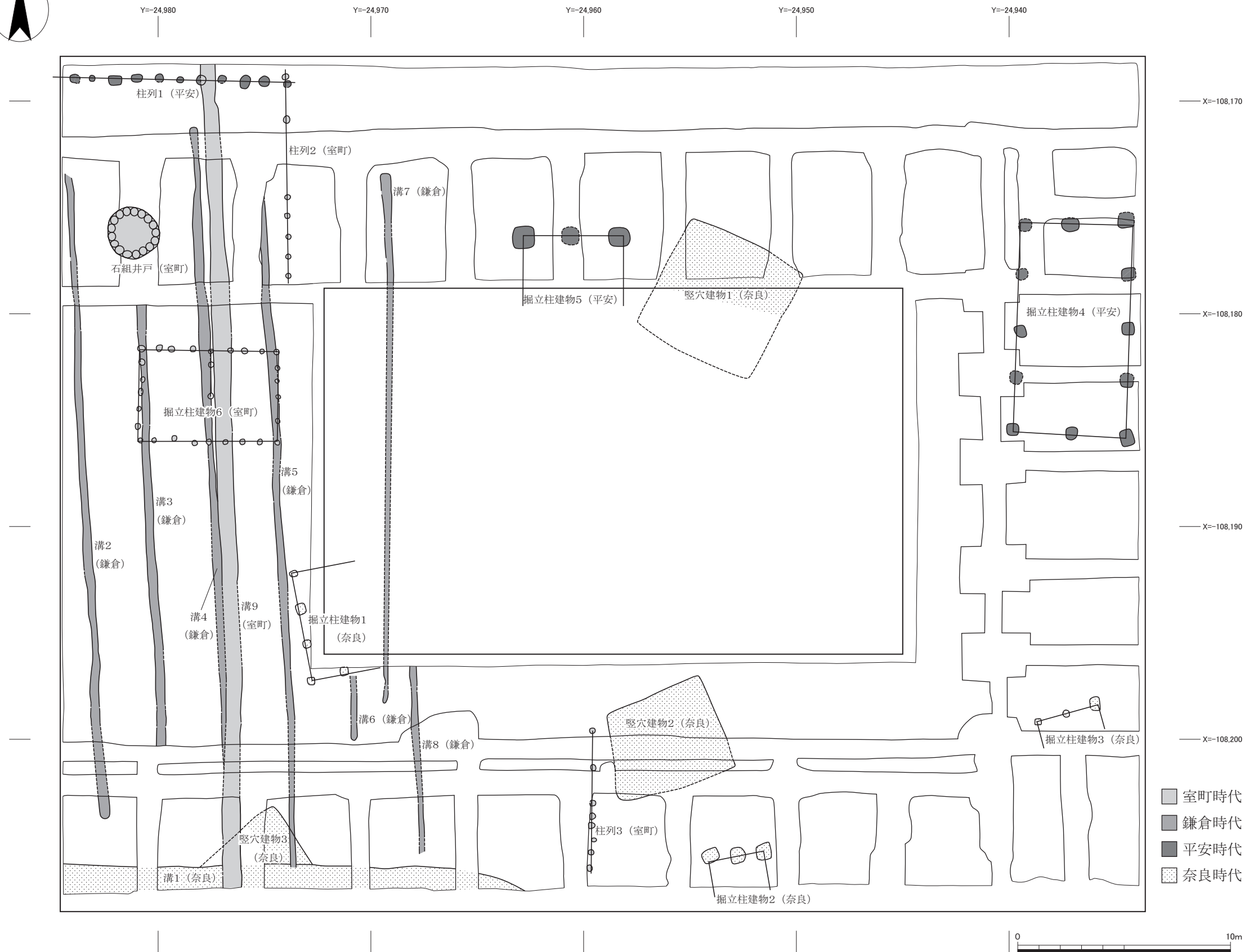


図2 調査区平面図 (1 : 200)